

第3章 人口・世帯等

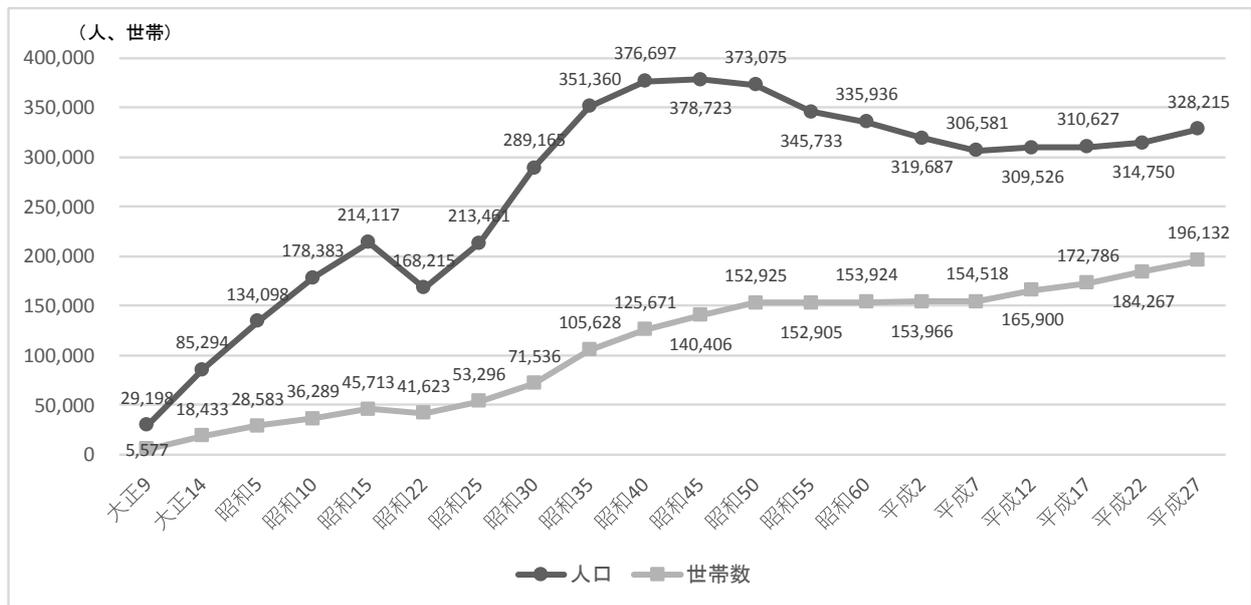
1 人口・世帯等の現況

(1) 人口と世帯

人口については、国勢調査によれば昭和20年から30年代にかけて急激に増加し、昭和45年をピークとして減少に転じていましたが、平成7年以降はわずかながら増加しています。

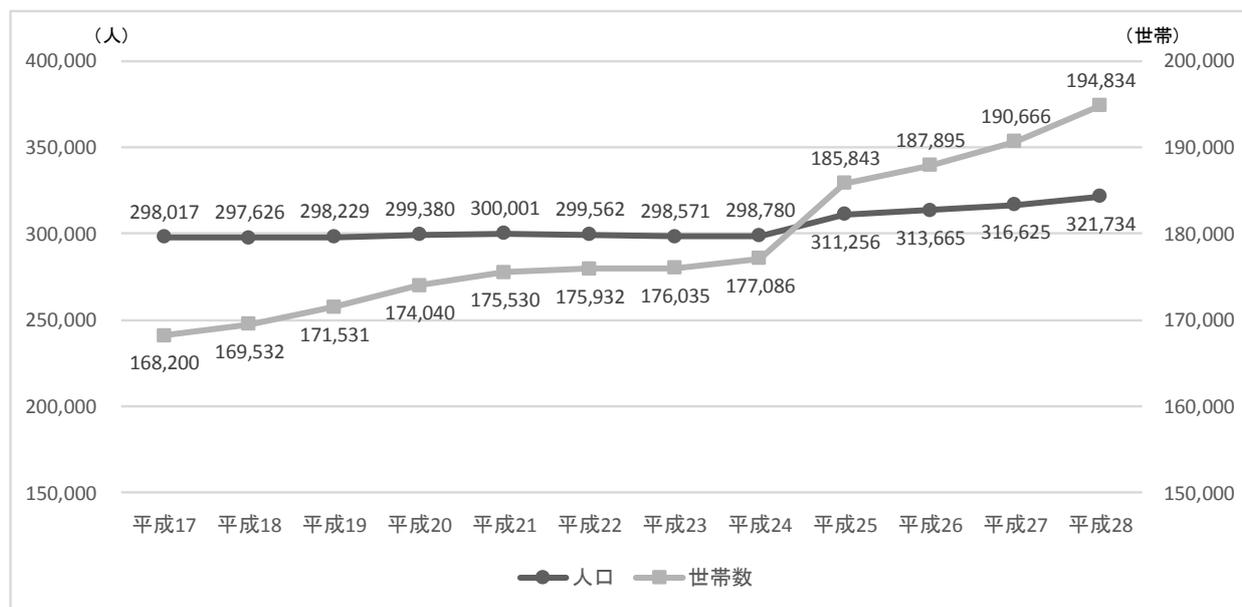
世帯数については、単身世帯の増加を要因として増加傾向にあります。特に、住民基本台帳によれば、平成23年以降において世帯数の増加が著しくなっています。

人口・世帯数の推移



【出典】国勢調査人口等基本集計（総務省統計局） ※各年10月1日現在

近年の人口・世帯数の動向



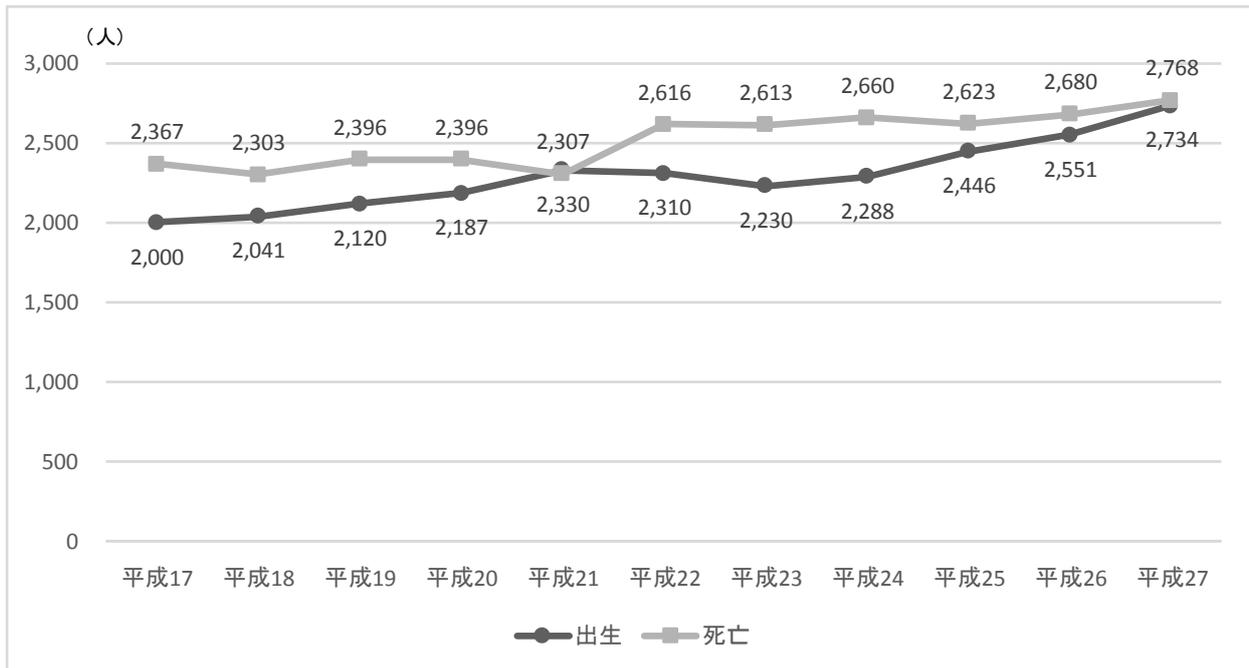
【出典】住民基本台帳 ※各年1月1日現在
 ※住民基本台帳法の一部改正に伴い、平成24年から外国人人口を含む。

(2) 人口動態

住民基本台帳をもとに過去10年間の自然動態の変化をみると、出生数は2,000人からやや増加傾向にありましたが、ここ数年（平成25～26年）の出生数は2,500程度まで伸びてきました。一方、死亡数は2,300人前後の横ばいで推移してきましたが、平成22年以降は2,600人程度まで増えています。

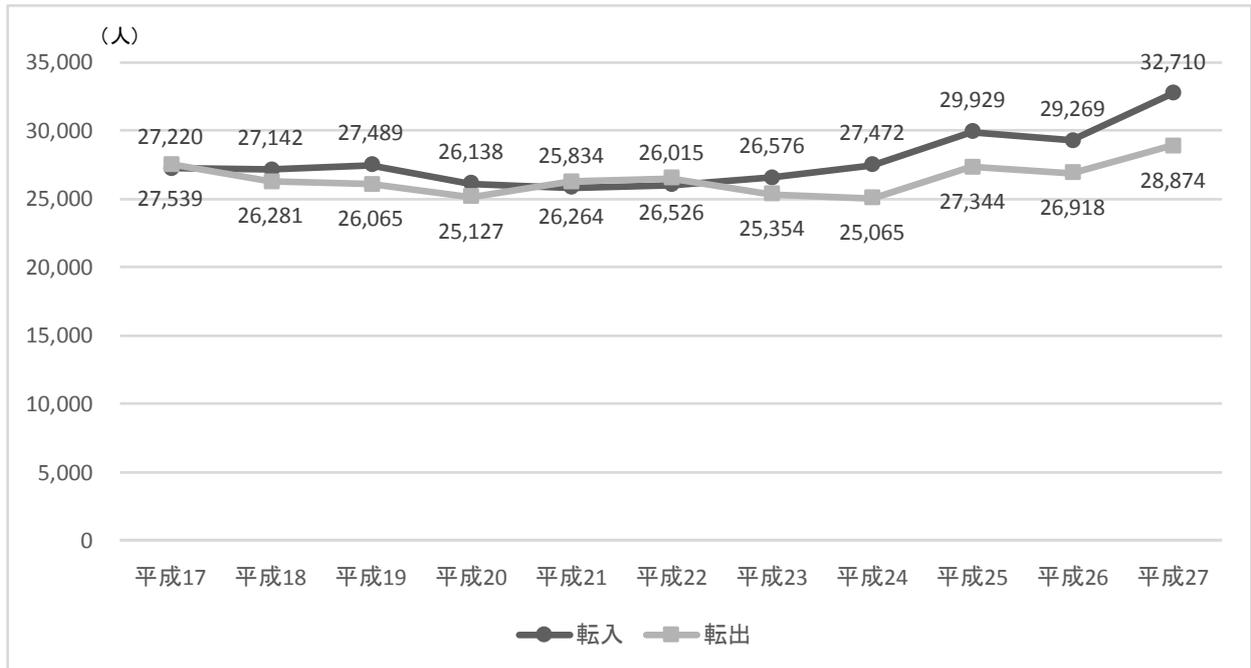
同様に社会動態の変化をみると、毎年区の人口の1割弱にあたる25,000～27,000人程度の転出と転入がありましたが、ここ数年（平成25～26年）は転入が30,000人近くまで伸び、転入が転出を約2,000人以上も上回る状況となっています。

自然動態の推移



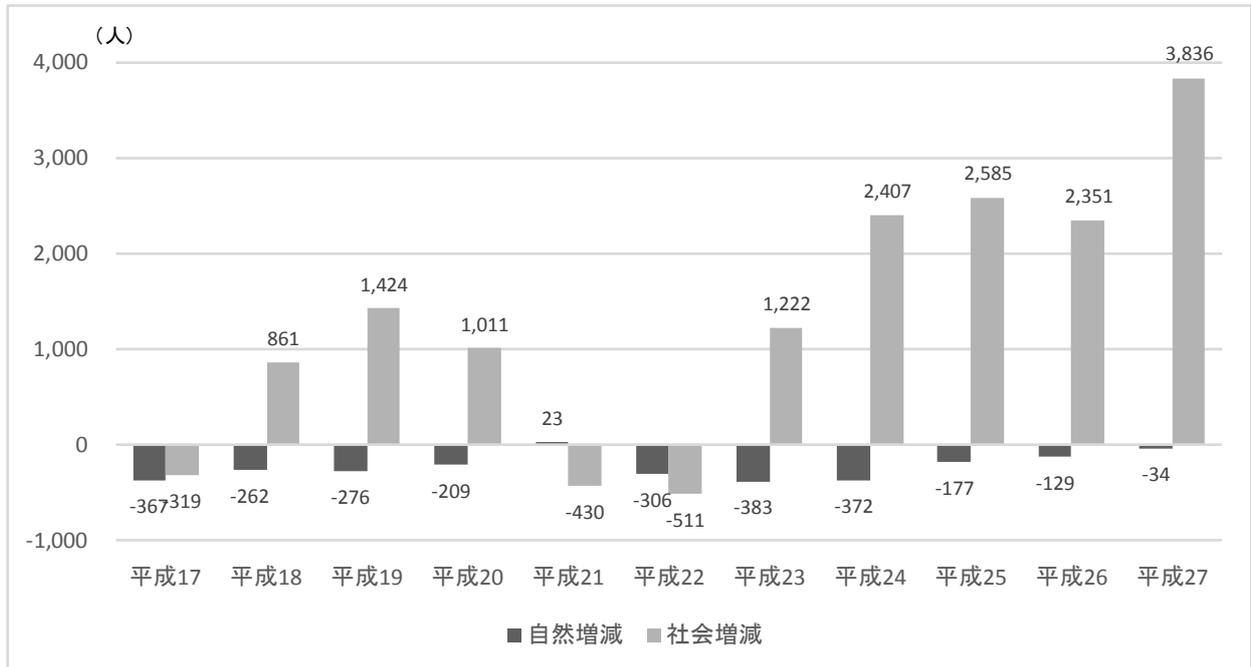
【出典】住民基本台帳 ※住民基本台帳法の一部改正に伴い、平成24年から外国人人口を含む。

社会動態の推移



【出典】住民基本台帳 ※住民基本台帳法の一部改正に伴い、平成24年から外国人人口を含む。

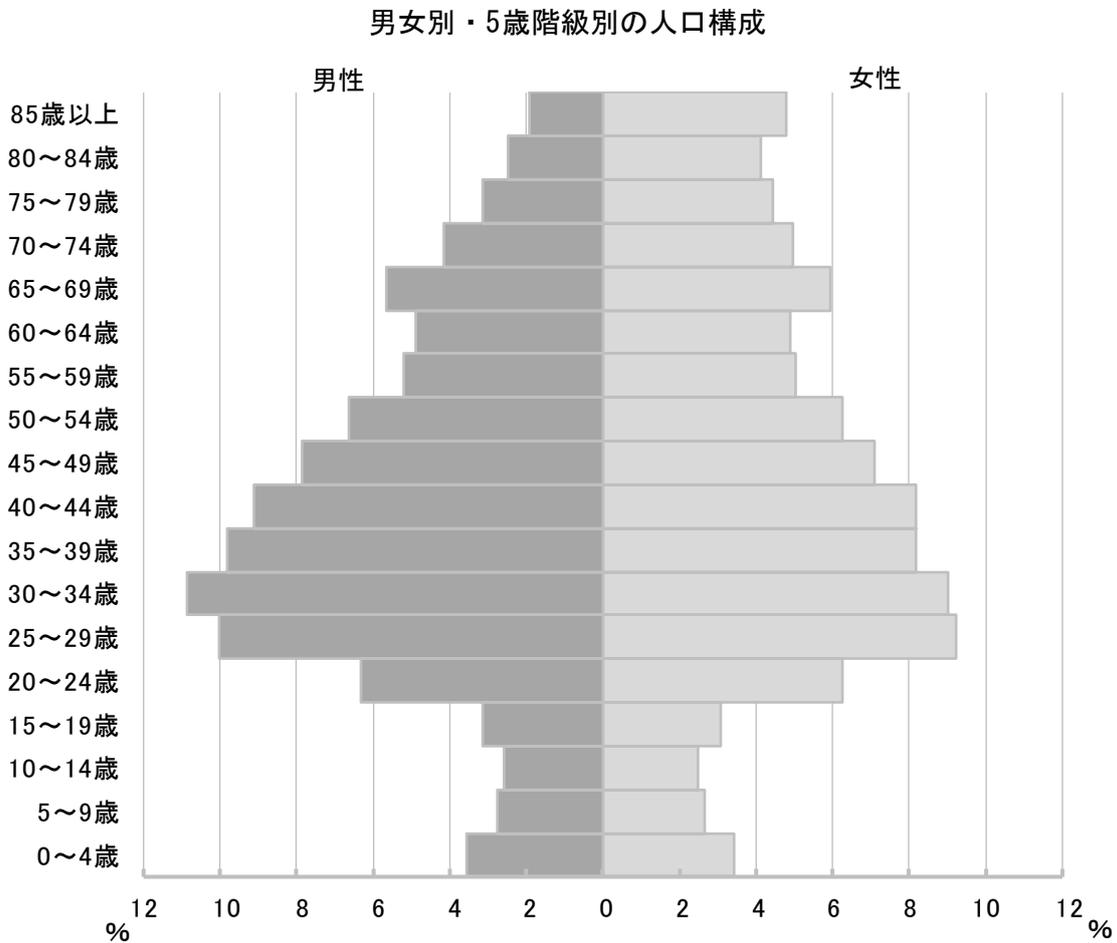
自然増減と社会増減の比較



【出典】住民基本台帳 ※住民基本台帳法の一部改正に伴い、平成24年から外国人人口を含む。

(3) 年齢構成（5歳階級別人口構成）

中野区の人口構成を年代別にみると、20歳代～30歳代は112,143人で総人口の34.9%を占め、23区平均を大きく上回っています。逆に19歳以下の年齢層は11.8%と23区平均のより下回っています。また、65歳以上の人占める割合は20.8%と、23区平均とほぼ同じ割合となっています。



【出典】 住民基本台帳 ※平成28年1月1日現在

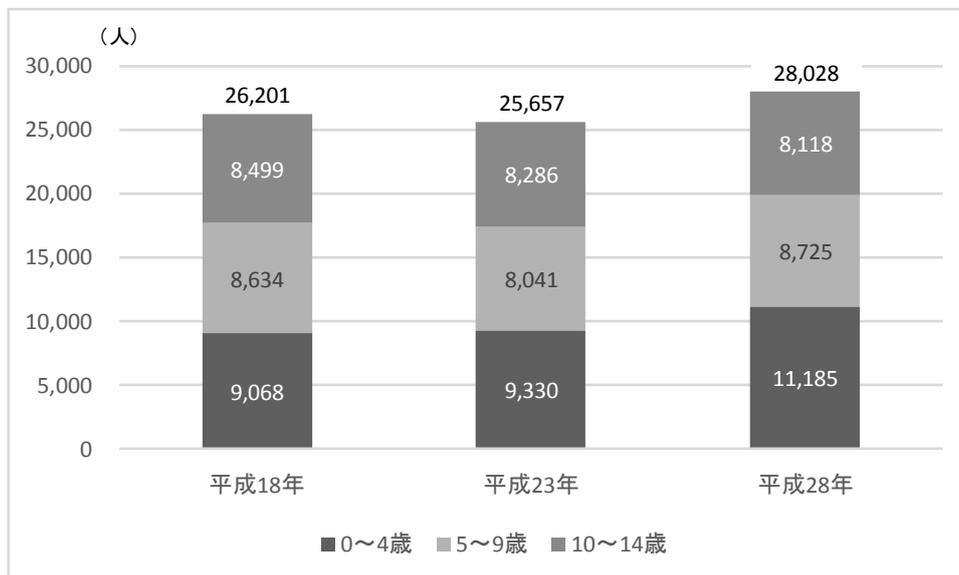
(4) 年少（0～14歳）人口の推移

住民基本台帳をもとに年少人口（0～14歳）の変化をみると、平成18年には約26,200人だったものが、平成23年には約25,600人と減少しましたが、平成28年には約28,000人への増加に転じています。

また、平成18年から平成28年にかけての変化を細かく5歳区分でみると、0～4歳人口は約9,100人から約11,200人へと著しく増加していますが、10～14歳人口は約8,500人から約8,100人へとやや減少しています。

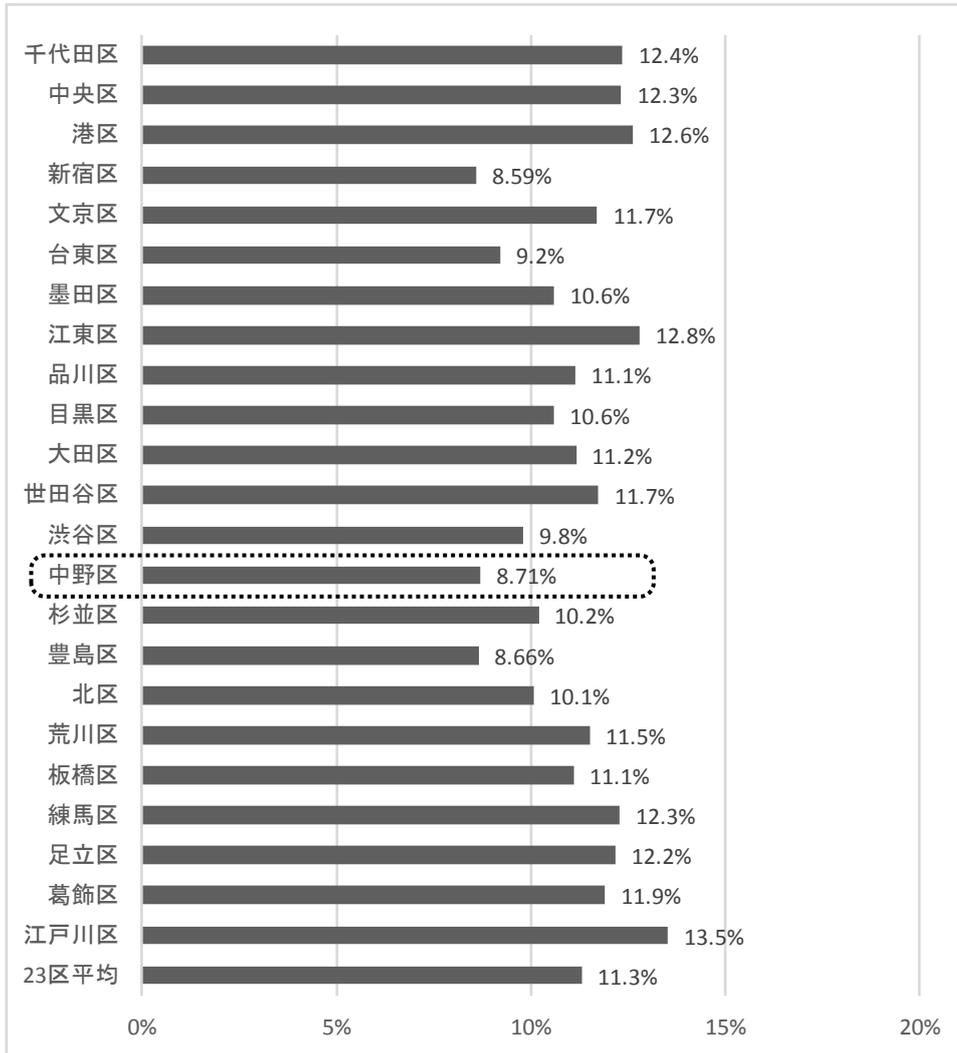
年少人口比率（総人口に占める0～14歳人口の割合）について東京23区で比較してみると、中野区は8.71%となっています。これは、新宿区の8.59%、豊島区の8.66%に次いで第3位であり、中野区は東京23区の中でも著しく子どもの割合が少ない都市のひとつであることがわかります。

年少（0～14歳）人口の推移



【出典】住民基本台帳 ※各年1月1日現在

年少人口比率（東京23区比較）

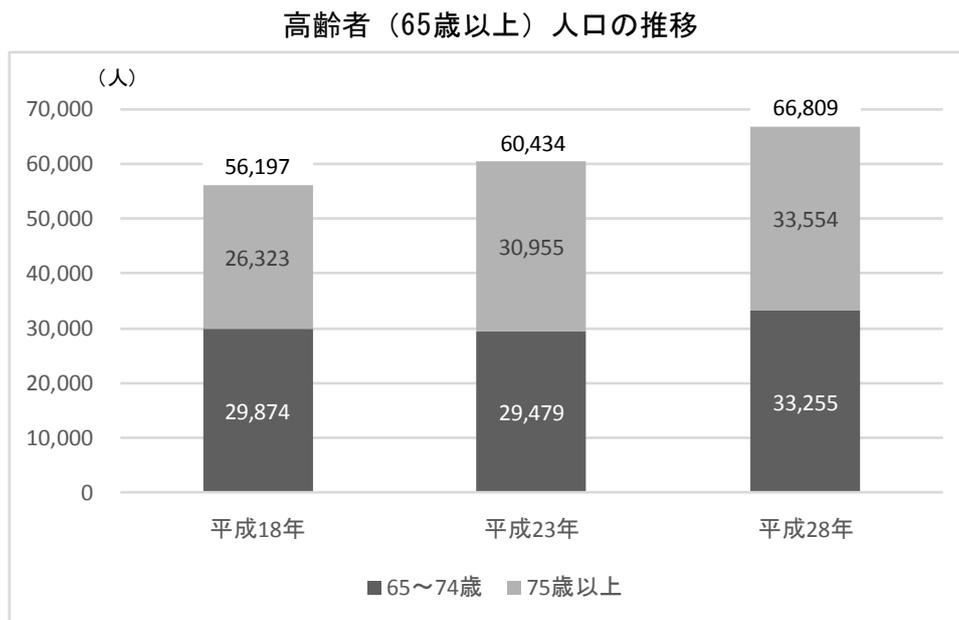


【出典】住民基本台帳（東京都総務部統計局） ※平成28年1月1日現在

(5) 高齢（65歳以上）人口の推移

住民基本台帳をもとに高齢人口（65歳以上）の変化をみると、平成18年には約56,200人だったものが、平成23年には約60,400人、平成28年には約66,800人への大きく増加の一途をたどっています。

また、平成18年から平成28年にかけての変化を65～74歳と75歳以上に分けてみると、75歳以上人口が約26,300人（平成18年）、約31,000人（平成23年）、約33,600人（平成28年）と持続的に増加しているのに対し、65～74歳人口はこの5年の伸びが顕著で、約29,500人（平成23年）から約33,300人（平成28年）へと増加しています。



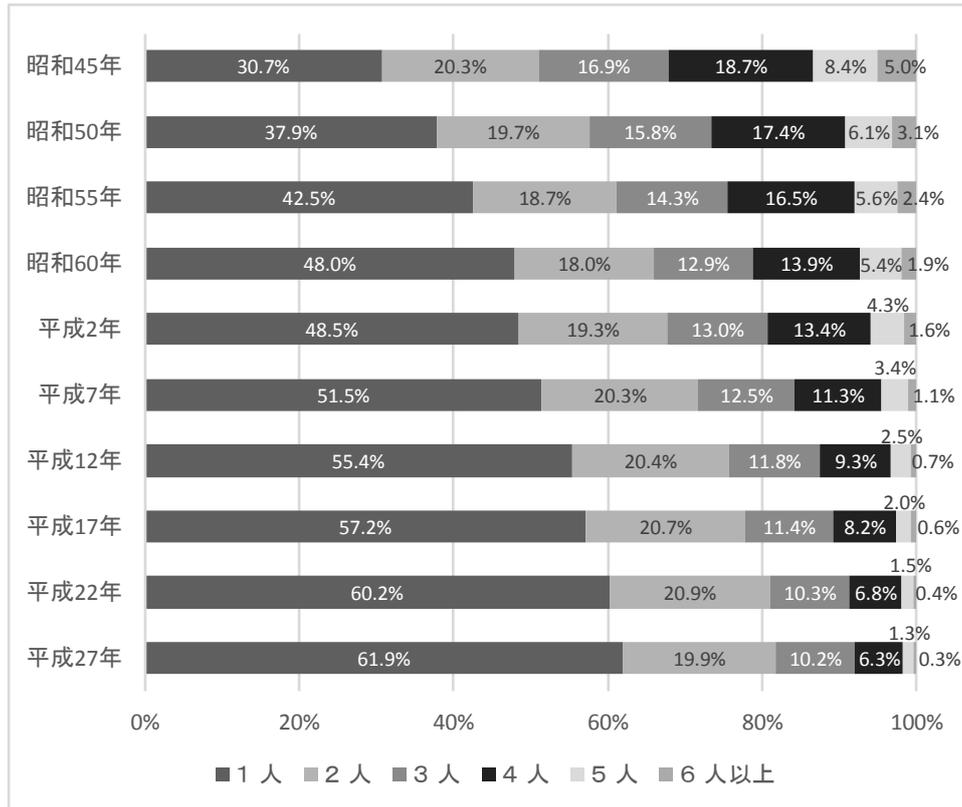
【出典】住民基本台帳 ※各年1月1日現在

(6) 世帯構成

世帯構成をみると、世帯人員1人の世帯が増加し、平成27年国勢調査では全世帯数の約6割を超え、平成17年に比べて約5ポイント増加しています。一方、3人以上の世帯は総じて減少の一途をたどっています。

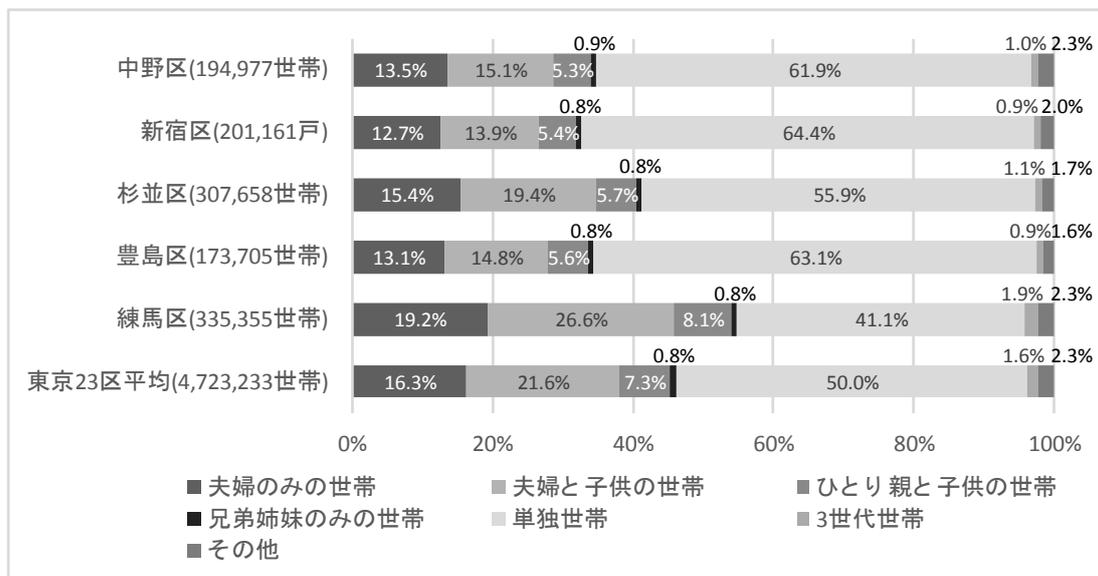
また、周辺区との比較でみると、中野区における単独世帯の占める割合は61.9%と、東京23区平均の50.0%を大きく上回っており、新宿区、豊島区に次いで高くなっています。

世帯人員別一般世帯割合の推移



【出典】国勢調査人口等基本集計結果（総務省統計局） ※各年10月1日現在

世帯の家族類型別の割合（周辺区との比較）



【出典】 国勢調査人口等基本集計結果（総務省統計局） ※平成27年10月1日現在

※世帯数：住宅に住む一般世帯。

(7) 子育て世帯の状況

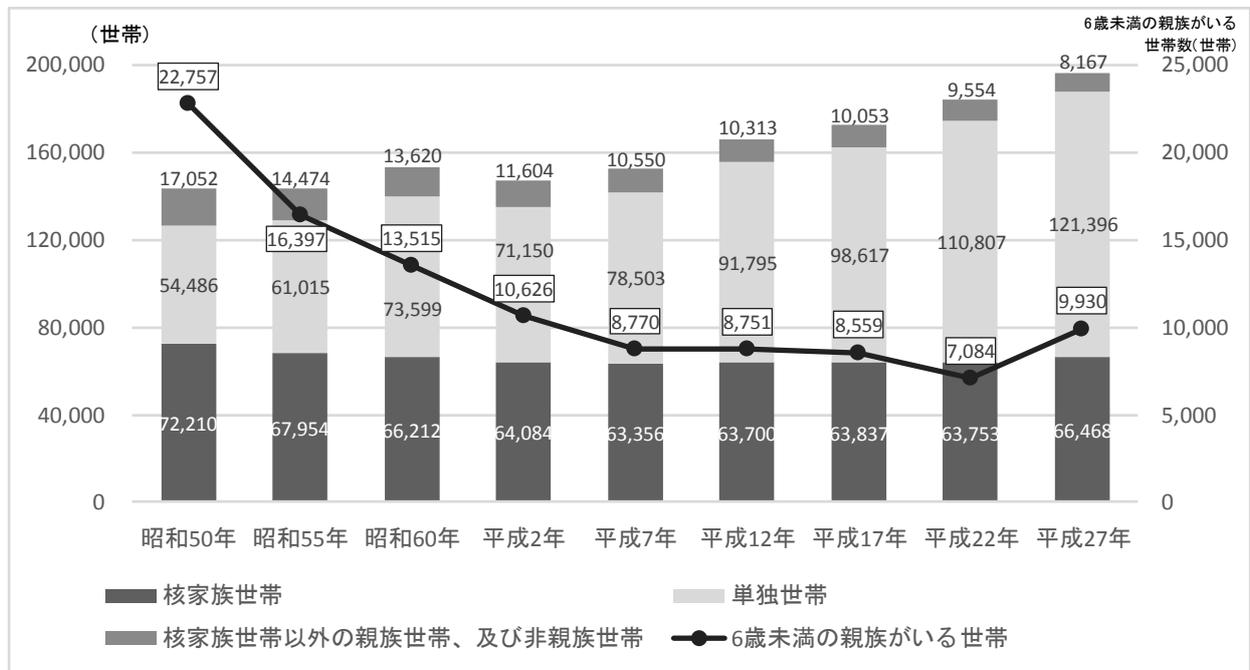
中野区における子育て世代を取り巻く世帯構成の状況をみると、平成22年までは核家族世帯の減少と単独世帯の増加が続き、これらの動向とあいまって子育て世帯（6歳未満の親族がいる世帯）が減少を続けていましたが、平成27年には核家族世帯、子育て世帯とも増加傾向に転じています。

また、一人の女性が一生の間に生む子どもの数を表す指標として「合計特殊出生率」があります。この指標の程度により将来の人口における自然増減に影響を与えるものとなります。

「合計特殊出生率」を全国的にみると、平成17年の1.26を下限として、その後はやや回復基調にあり、平成24年以降は1.4を超える形で推移しています。

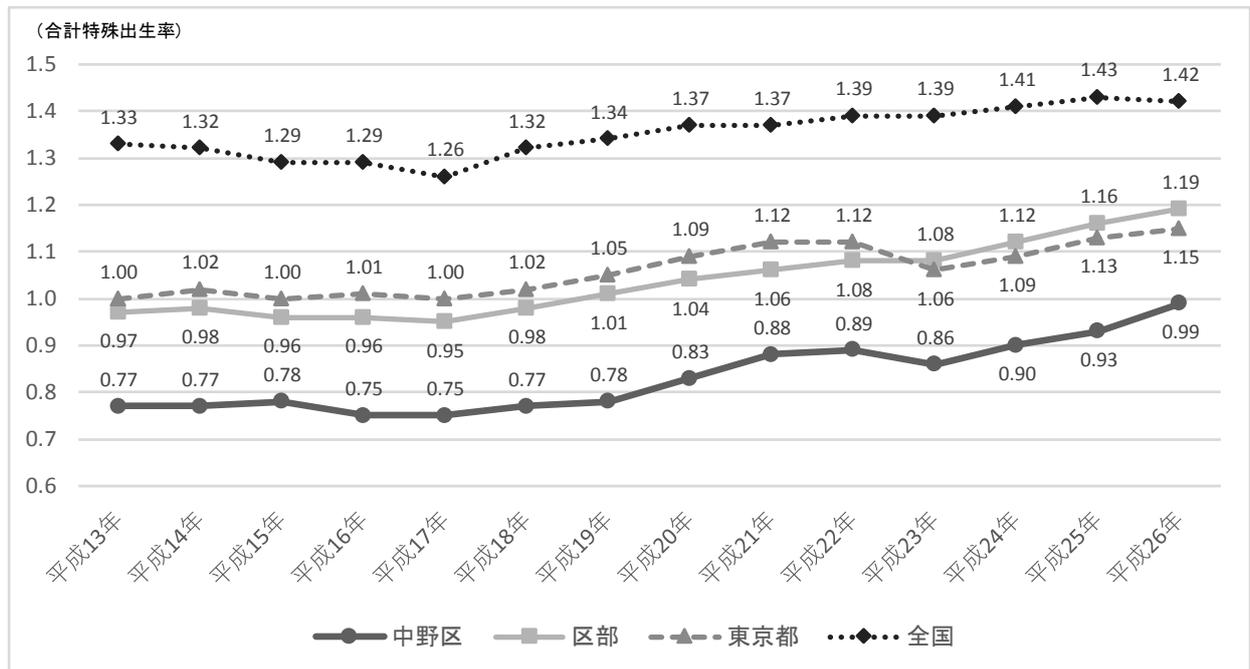
中野区における「合計特殊出生率」は、これまで0.8前後ときわめて低い値で推移してきましたが、平成24年以降は0.9を超え、平成26年には0.99まで回復してきました。しかし、東京都平均もしくは23区平均からみても、中野区の「合計特殊出生率」は依然として低い値にとどまっているのが現状です。

世帯構成（6歳未満の親族がいる世帯）の推移



【出典】国勢調査人口等基本集計（総務省統計局） ※各年10月1日現在

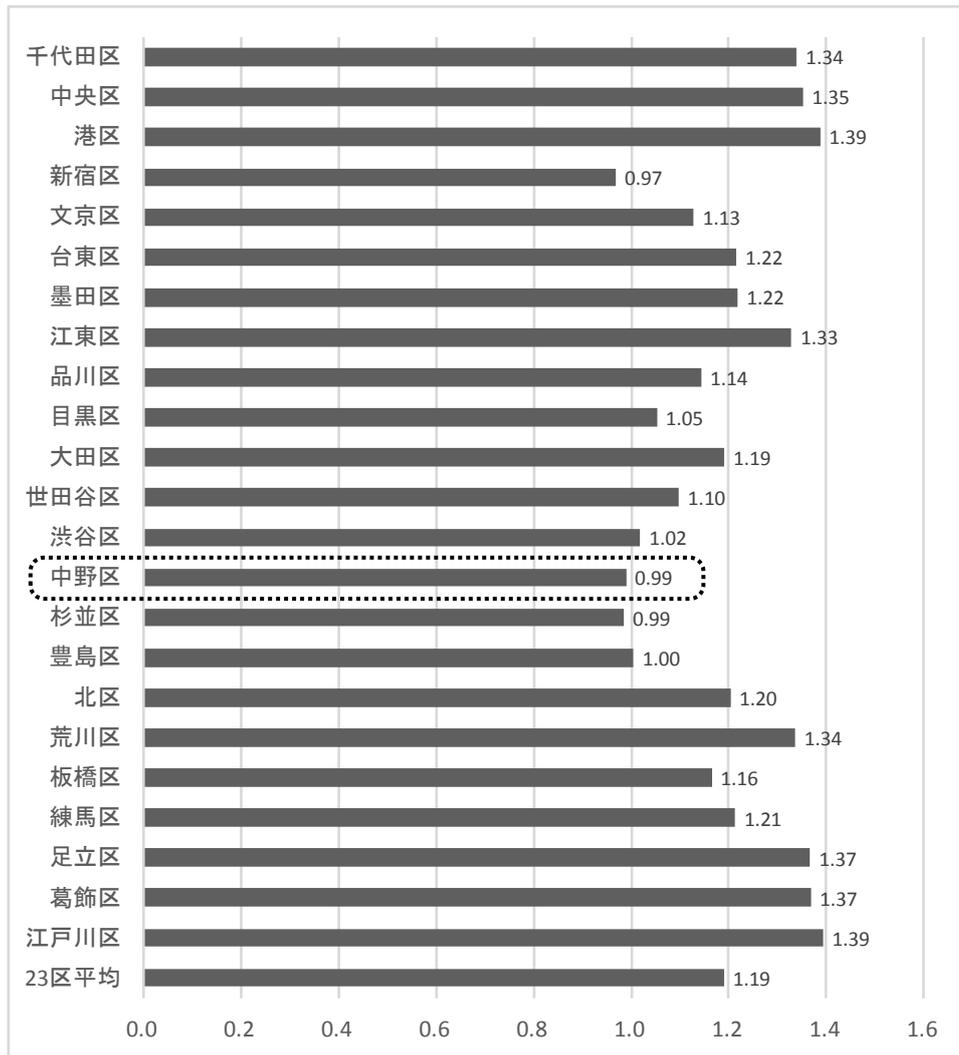
合計特殊出生率の推移（区部、東京都、全国との比較）



【出典】人口動態統計（東京都福祉保健局）

※合計特殊出生率：15歳から49歳までの女子の年齢別出生率を合計したもので、1人の女子が一生涯の間に生む平均子ども数に相当する。

合計特殊出生率（平成26年、東京23区比較）



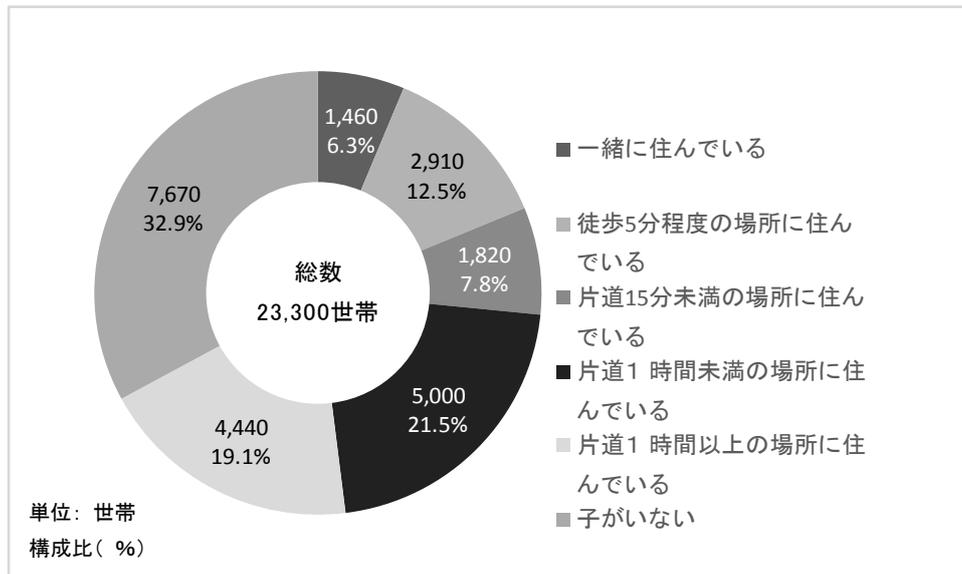
【出典】人口動態統計（東京都福祉保健局）

(8) 高齢世帯の子の居住地

高齢世帯の子の居住地の状況をみると、「一緒に住んでいる」、「徒歩5分程度の場所に住んでいる」、「片道15分未満の場所に住んでいる」世帯を合わせ、子が親元に同居もしくは近居の状況にある世帯は、高齢世帯総数の約27%となっています。これに「片道1時間未満の場所に住んでいる」世帯も含めると、高齢世帯総数の半数を占めています。一方、高齢世帯のうち、約33%の世帯は「子がいない」世帯となっています。

子の居住地の状況を高齢単身世帯と高齢夫婦世帯の比較でみると、高齢単身世帯ほど子の居住地は徒歩5分程度の近居の傾向がみられ、高齢夫婦世帯ほど子の居住地が片道1時間未満ないし1時間以上の傾向がみられます。

高齢世帯の子の居住地の状況

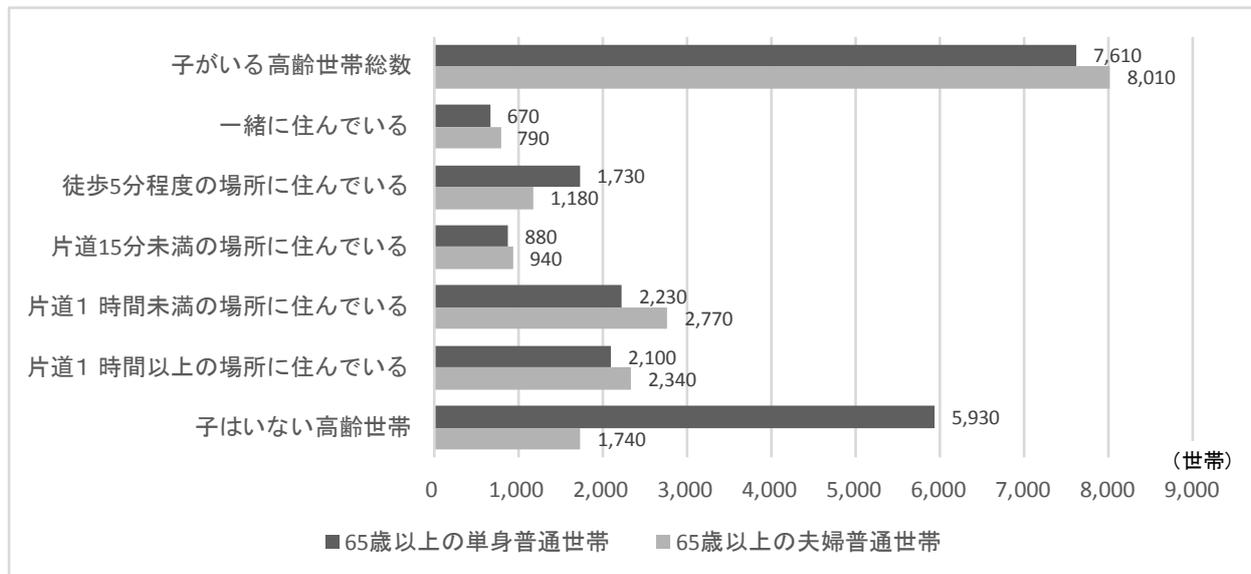


【出典】平成25年住宅・土地統計調査（総務省統計局） ※平成25年10月1日現在

※高齢世帯：65歳以上の単身及び夫婦のみの世帯。

※一緒に住んでいる：同じ建物又は敷地内に住んでいる場合も含む。

高齢世帯の子の居住地の状況（単身世帯と夫婦世帯の比較）



【出典】平成25年住宅・土地統計調査（総務省統計局） ※平成25年10月1日現在

※高齢世帯：65歳以上の単身及び夫婦のみの世帯。

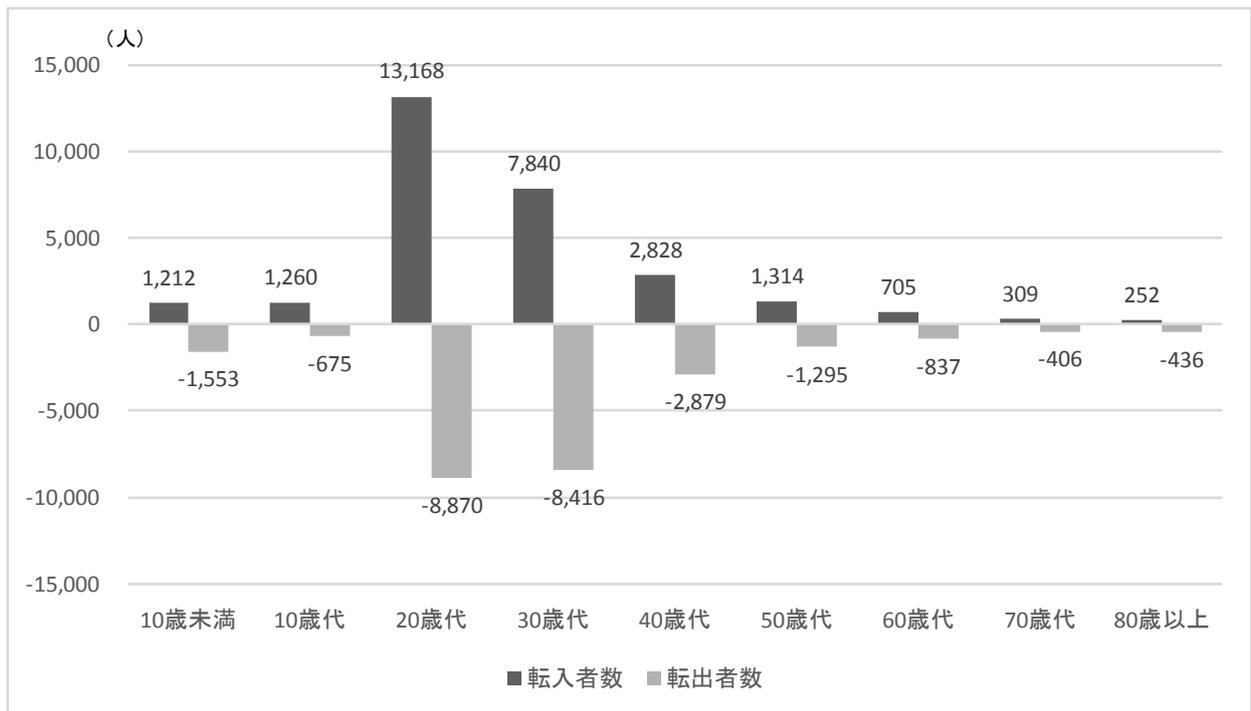
※一緒に住んでいる：同じ建物又は敷地内に住んでいる場合も含む。

(9) 転入・転出者の状況

転入・転出者の状況を世帯主の年齢階層別（平成27年）にみると、20～30歳代が転入・転出者の多くを占めており、転入者は「20歳代」で約13,200人、「30歳代」で約7,800人、一方、転出者は「20歳代」で約8,900人、「30歳代」で約8,400人となっています。

これを年度別に世帯類型別でみると、単身世帯については、20歳代での転入超過数が約5,200人（平成27年度）に達しており、その傾向はこの数年で強まってきたものです。また、夫婦二世帯については、「30歳代」の転出超過が続いており、子育て世帯（18歳以下の子どもを含む二人以上の世帯）についても、「30歳代」の転出超過が他の年齢階層に比べてやや目立つ形で推移しています。

他市区町村からの転入・転出者数（年齢階級別）

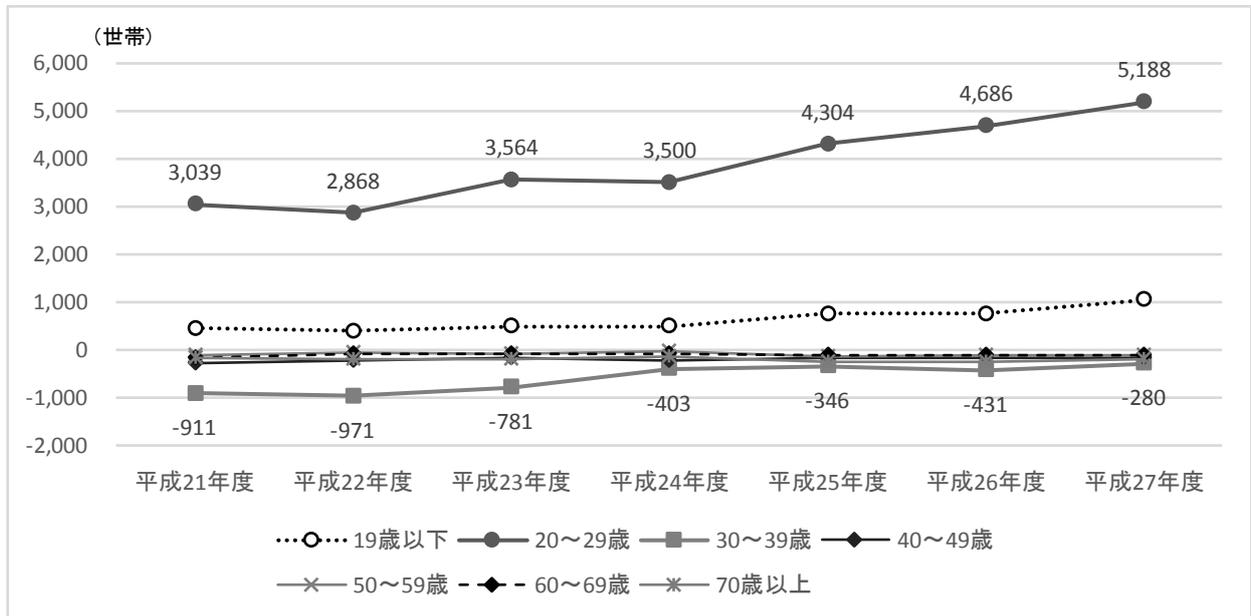


【出典】平成27年住民基本台帳人口移動報告（総務省統計局）

※転入者はプラス表記、転出者はマイナス表記とした。

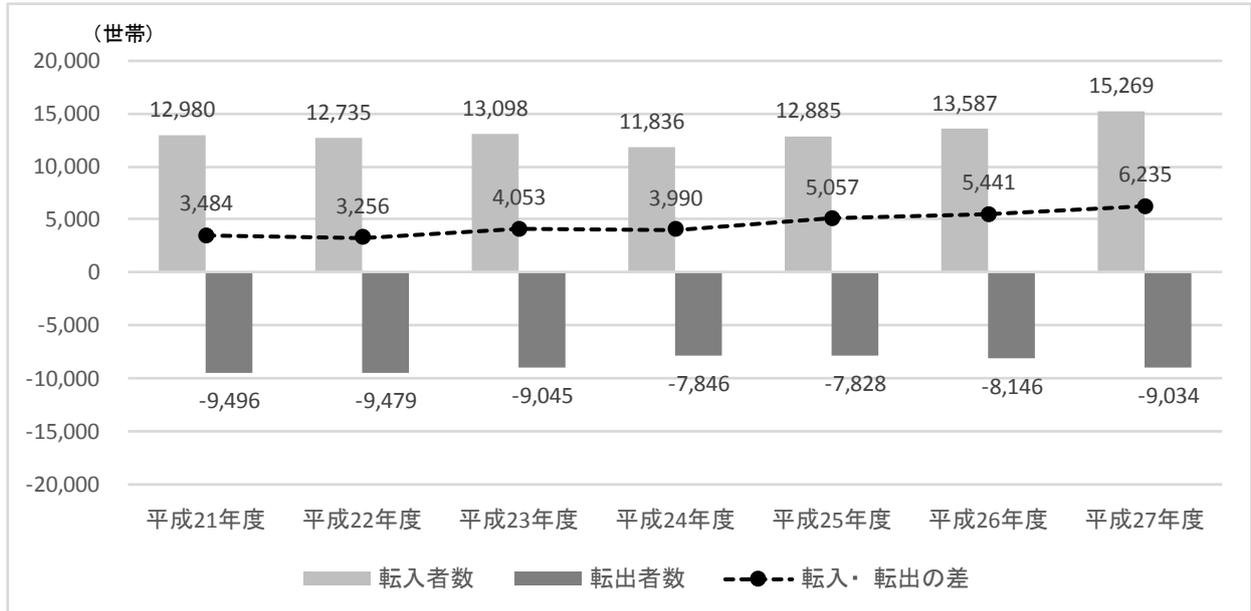
【①単身世帯の転入・転出者】

単身世帯の転入・転出者数（転入－転出）の推移（年齢階級別）



【出典】住民基本台帳

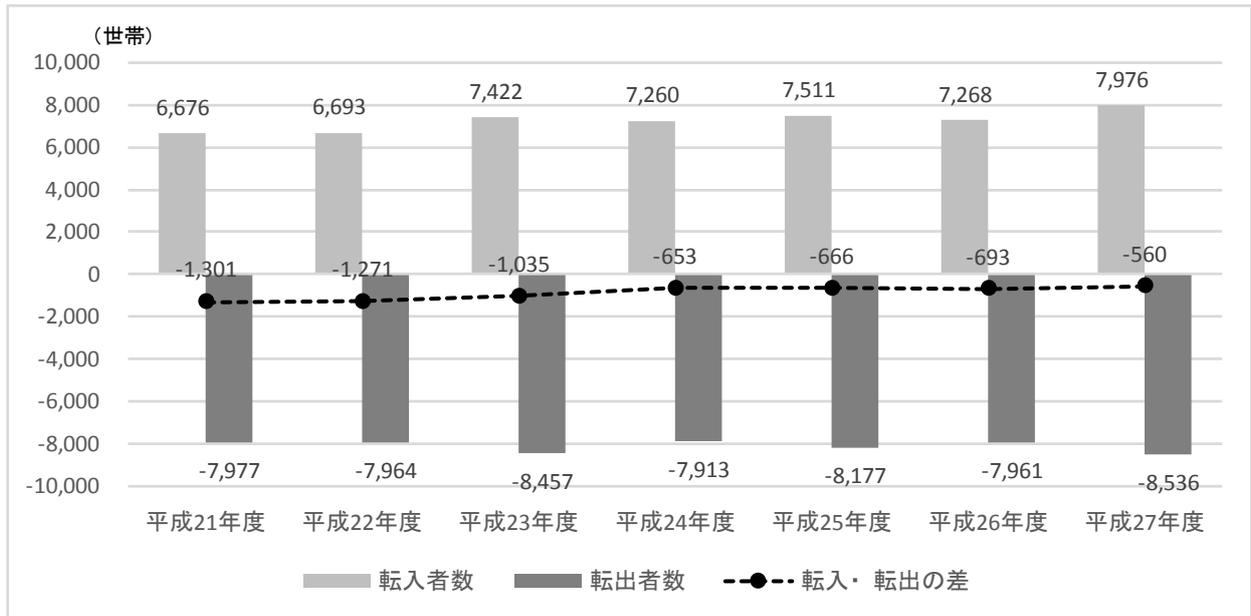
単身世帯（29歳以下）の転入・転出者数の推移



【出典】住民基本台帳

※転入者はプラス表記、転出者はマイナス表記とした。

単身世帯（30～59歳）の転入・転出者数の推移

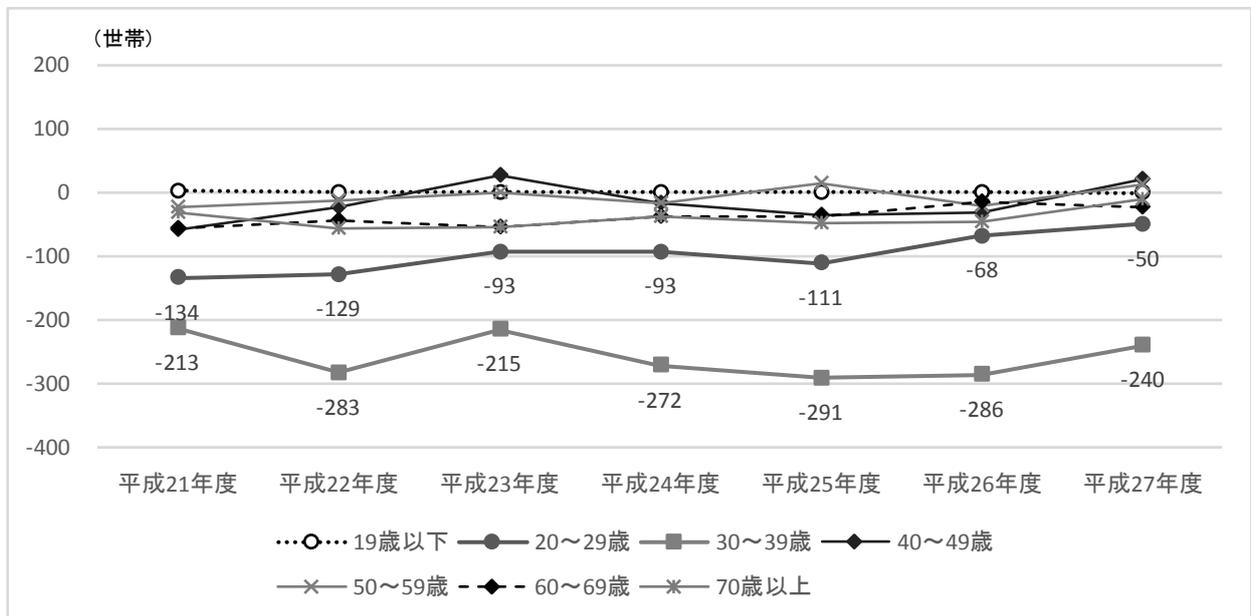


【出典】住民基本台帳

※転入者はプラス表記、転出者はマイナス表記とした。

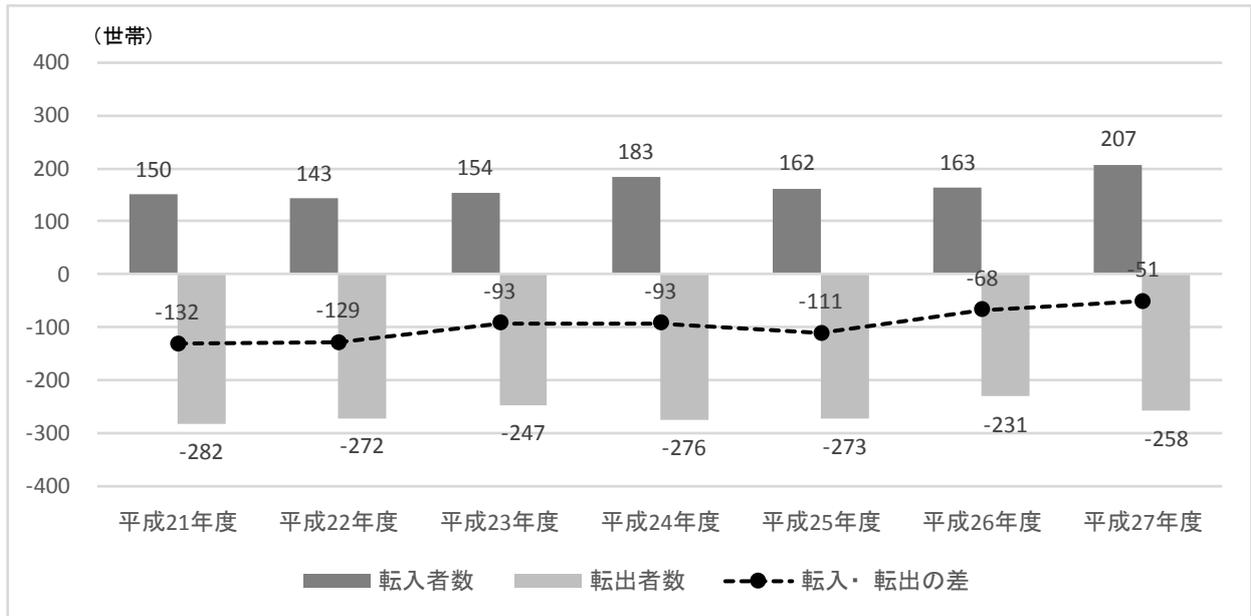
【②夫婦二人世帯の転入・転出者】

夫婦二人世帯の転入・転出者数（転入－転出）の推移（世帯主の年齢階級別）



【出典】住民基本台帳

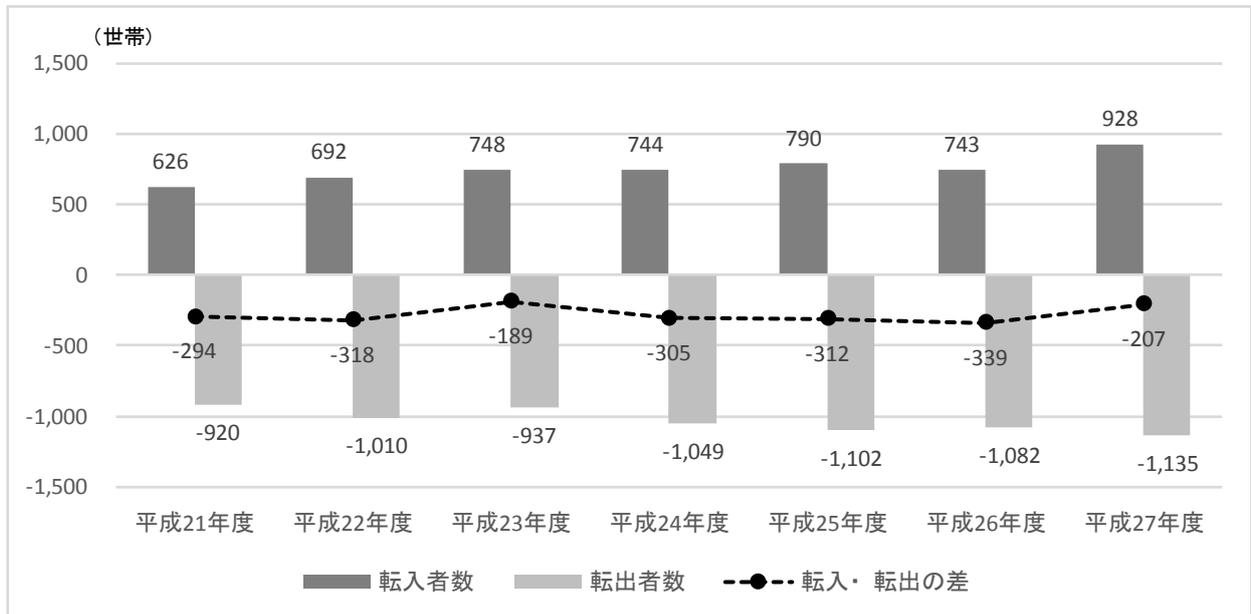
夫婦二世帯（世帯主29歳以下）の転入・転出者数の推移



【出典】住民基本台帳

※転入者はプラス表記、転出者はマイナス表記とした。

夫婦二世帯（世帯主30～59歳）の転入・転出者数の推移

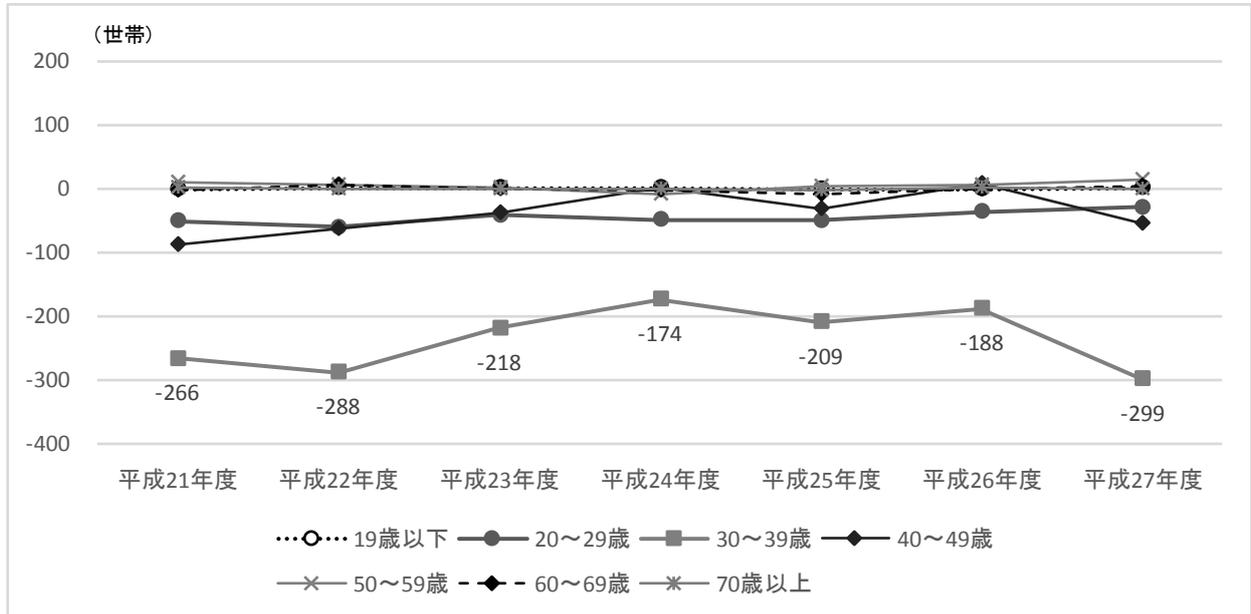


【出典】住民基本台帳

※転入者はプラス表記、転出者はマイナス表記とした。

【③子育て世帯の転入・転出者】

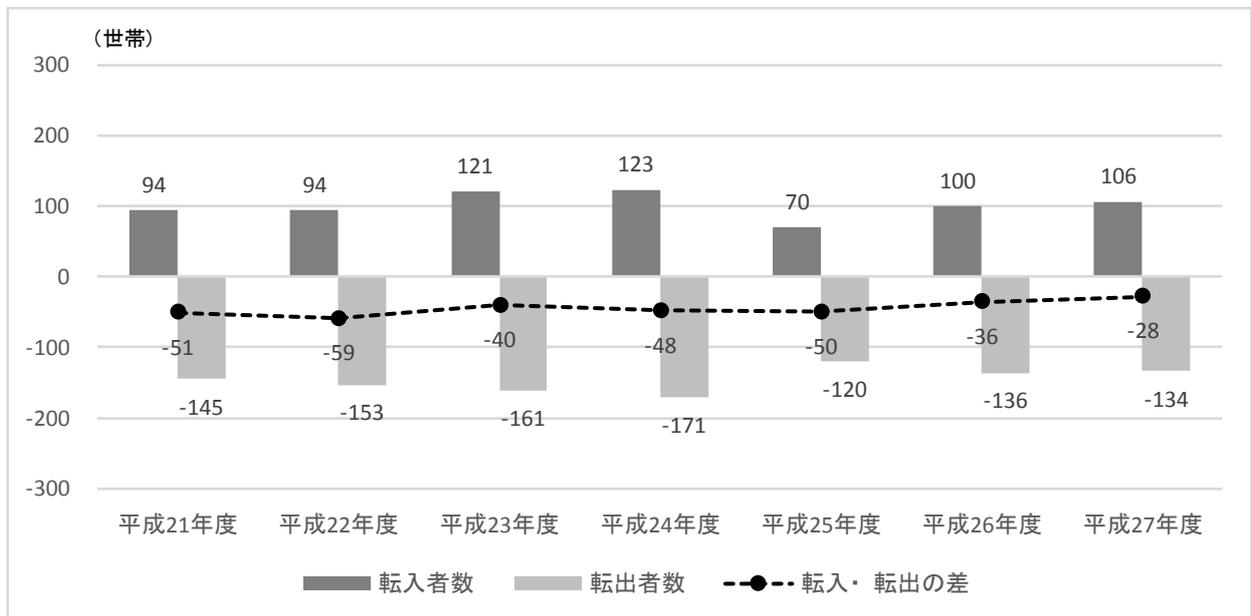
子育て世帯の転入・転出者数（転入－転出）の推移（世帯主の年齢階級別）



【出典】住民基本台帳

※子育て世帯：18歳以下の子どもを含む二人以上の世帯。

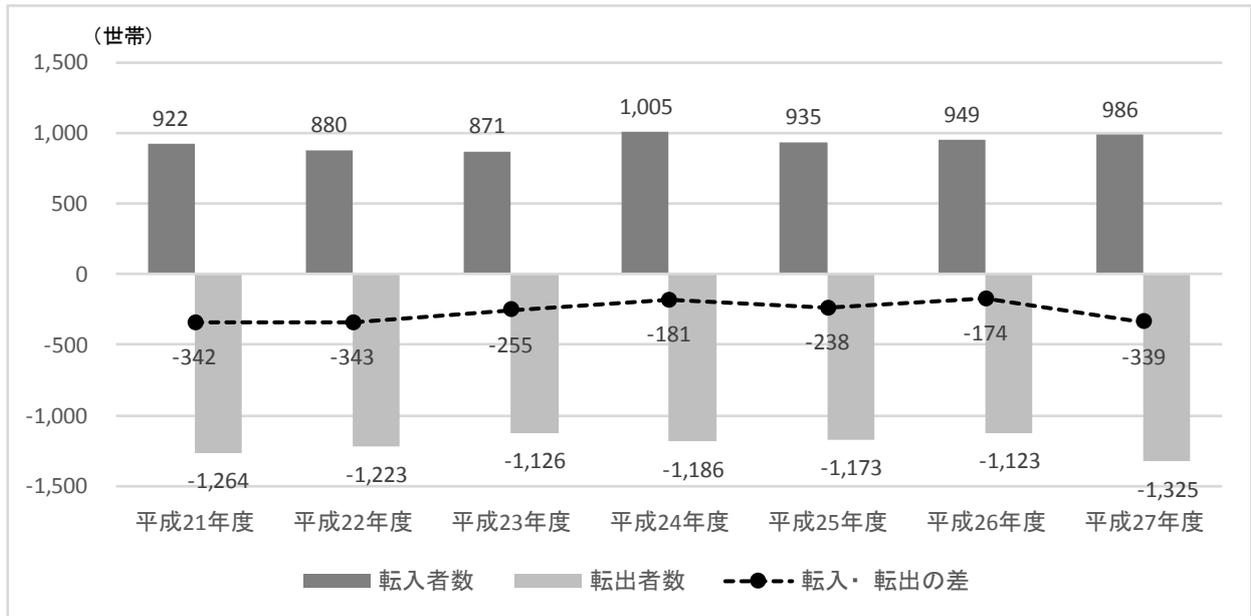
子育て世帯（世帯主29歳以下）の転入・転出者数の推移



【出典】住民基本台帳

※子育て世帯：18歳以下の子どもを含む二人以上の世帯。転入者はプラス表記、転出者はマイナス表記とした。

子育て世帯（世帯主30～59歳）の転入・転出者数の推移



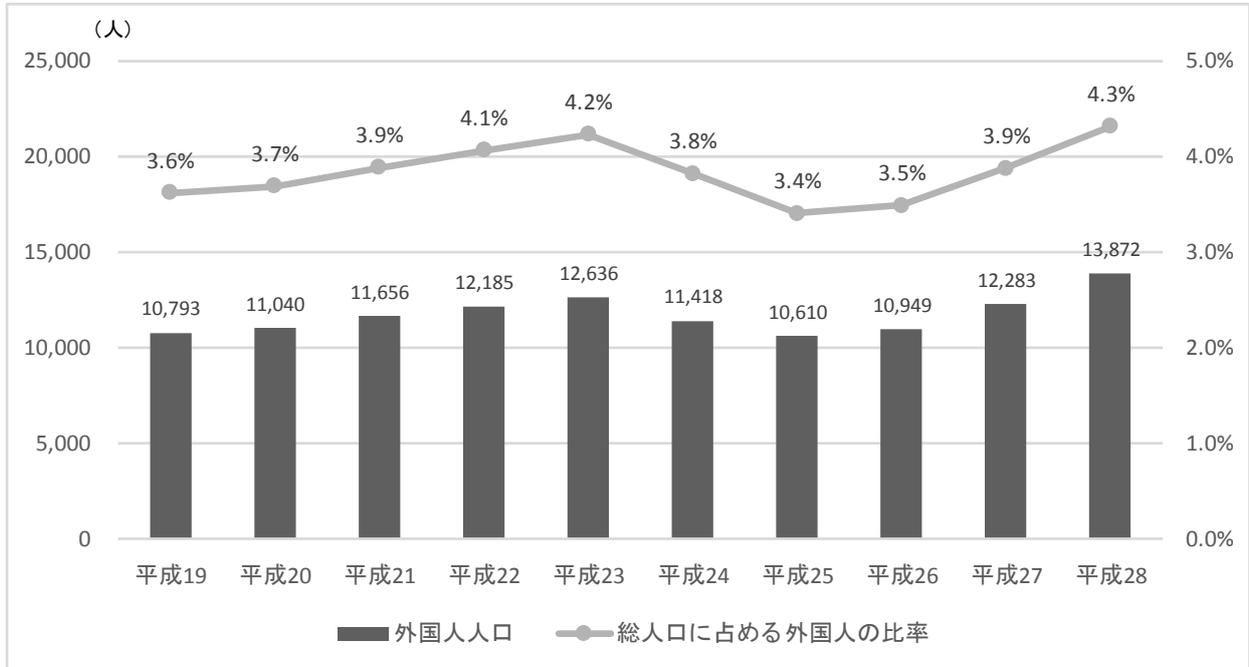
【出典】住民基本台帳

※子育て世帯：18歳以下の子どもを含む二人以上の世帯。転入者はプラス表記、転出者はマイナス表記とした。

(10) 外国人人口の推移

中野区の外国人人口（外国人登録者数）は平成23年の約12,600人をピークに、一時的に（平成24～26年）減少しましたが、平成28年にはこれまでで最も多くの外国人人口約13,900人となっています。

外国人人口（外国人登録者数）の推移



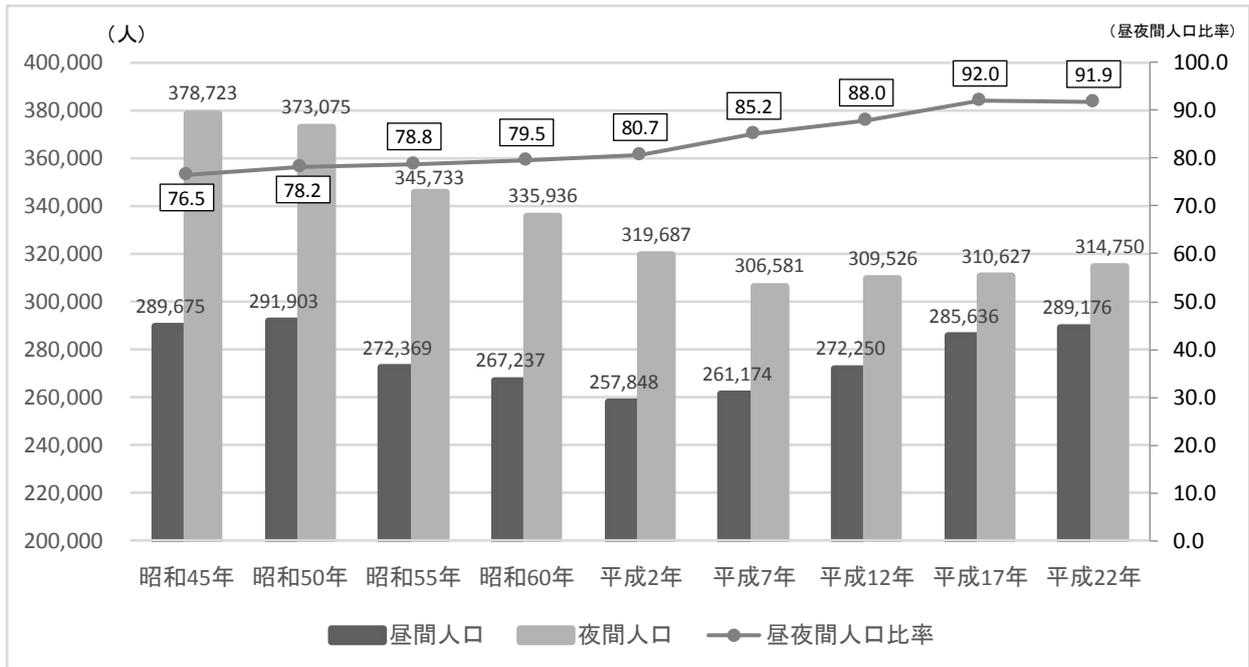
【出典】住民基本台帳、但し平成24年までは外国人登録 ※各年1月1日現在

※平成24年7月に施行された住民基本台帳法の一部改正及び外国人登録法の廃止により、外国人も住民基本台帳法の適用対象となった。

(11) 昼間人口・夜間人口

中野区の昼間人口は 289,176 人、夜間人口は 314,750 人(ともに平成 22 年)と、他の地域から中野区に流入する人数よりも、中野区から他の地域に通勤や通学で流出する人数の方が上回っています。但し、以前に比べて昼間人口が増加傾向で、昼間人口と夜間人口の差が縮小していく中で、昼夜間人口比率は 91.9%(平成 22 年)まで高まっています。

昼間人口・夜間人口の推移



【出典】国勢調査従業地・通学地による人口・産業等集計（総務省統計局） ※各年10月1日現在

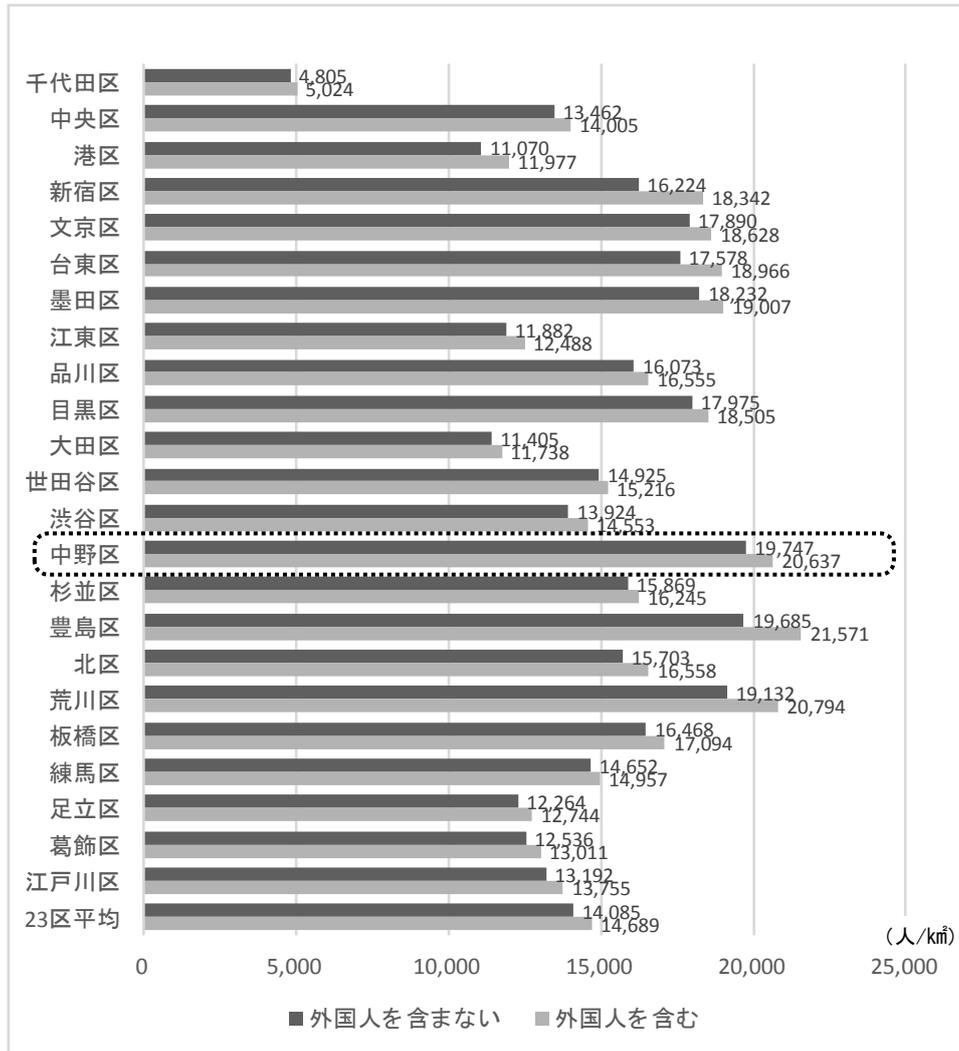
※昼夜間人口比率=昼間人口/夜間人口

(12) 人口密度

平成28年1月1日における中野区の人口密度（外国人を含まない場合）は19,747人/㎢と23区で最も高くなっており、次いで豊島区の19,685人/㎢、荒川区の19,132人/㎢と続いています。中野区の人口密度は23区平均14,085人/㎢の約1.5倍にも達しており、相当高密な都市であることがわかります。

また、外国人を含む場合、中野区の人口密度は20,637人/㎢で23区中の第3位となっています。最も高いのは、豊島区の21,571人/㎢、次いで荒川区の20,794人/㎢と続いています。

人口密度（東京23区比較）



【出典】住民基本台帳（東京都総務部統計局） ※平成28年1月1日現在

2 人口・世帯等の課題

項目	主要な課題
人口と世帯	人口・世帯数とも増加し続け、特にここ数年の世帯数の増加は顕著になっており、単身者など世帯人員の少ない世帯の増加に対応した住生活の確保が課題となっています。
人口動態	自然動態については死亡数が出生数を上回る状態、社会動態については転入数が転出数を上回る状態が続いており、なかでも社会増加の高まりに対応した住生活の確保が課題となっています。
年齢構成（5歳階級別人口構成）	20歳代～30歳代の比較的若い世代の占める割合が高くなっており、これらの世代が将来にわたって引き続き定住できる条件や環境などの確保が課題となっています。
年少（0～14歳）人口の推移	0～4歳人口が増加傾向にあるものの、年少人口全体では東京23区の中でも低い比率が目立っており、子どもの成長とともに転出することなく住み続けられる対策などが課題となっています。
高齢（65歳以上）人口の推移	65歳以上人口が大きく増加の一途をたどっており、安心できる住まいづくりなど、今後ますます進むであろう高齢社会に対応した住生活の確保が課題となっています。
世帯構成	1人世帯が世帯数全体の多数を占める偏った状況がますます進み、3人以上世帯は少数派になりつつあることから、多様な家族形態によって住み続けられる条件や環境の確保が課題となっています。
子育て世帯の状況	合計特殊出生率は回復基調にあるものの依然として低く、6歳未満の親族がいる世帯も減少の一途をたどっており、結婚率の低下や住まいを含めた子育て環境に関する対策が課題となっています。
高齢世帯の子の居住地	高齢単身世帯で子は近居、高齢夫婦世帯で子は区外居住の傾向が若干みられ、親世代の老齢化に伴う子の居住のあり方についての対応が課題となっています。
転入・転出者の状況	20～30歳代の転入・転出が著しく、なかでも20歳代単身世帯の転入超過と30歳代夫婦・子育て世帯の転出超過がみられ、子育て期にかけて住み続けられる条件や環境の確保が課題となっています。
外国人人口の推移	外国人人口が増加し、総人口に占める外国人の比率が高まりつつあり、地域における多文化共生や災害時支援などのあり方も住生活における課題となっています。
昼間人口・夜間人口	日中に区内と他の地域の間で通勤・通学者の出入りが活発化しており、居住者に限らないこれら移動人口のニーズに応えるまちづくりの充実も課題となっています。
人口密度	人口密度が東京23区の中でも極めて高い状態にあり、住宅密集市街地が抱える住環境上の問題や大規模震災発生時の対策など数多くの問題の解決が課題となっています。